



Title	EXPLICATION DE TEXTES : その重要性と実例
Author(s)	片山, 忠雄
Citation	大阪外大英米研究. 1964, 4, p. 77-100
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98954
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

EXPLICATION DE TEXTES

——その重要性和実例——

片 山 忠 雄

〔Ⅰ〕

我国における英文学研究の跡を回顧するとき、視点をその研究法にのみ限定しても様々な異見の得る可能性があり、また事実その在り方はいうまでもなく、その過去の有りの儘の姿についても統一的見解に達し得ることは必ずしも容易ではないであろう。しかし、大正十年発刊以来昭和十八年に至る二十余年間に総計百五十冊に及んだ研究社英文学双書に代表される訓詁中心主義なものを最有力なものと思倣しても事実を歪曲したことにはならないであろう。次の説はこの訓詁学的傾向をその発生過程、極端な弊害等の関連において述べたものと思われる。「文献学的書誌学的方法の過重は自ら訓詁註疏の学風を生み、その極まるところ、これを以て文学の研究と誤認するに至るのであるが、この風潮が、日本の学界を久しきにわたり支配していた事は否定出来ないように思われる。」* この学統に属する人々とはその態度を異にする研究者として上文の筆者は坪内逍遙、小泉八雲、上田敏、平田禿木の名をあげておられる。** その学風の特徴の一つは、文学研究において訓詁註釈のみを以て足れりとせず、より広い視点から作品の心髄に迫らんとする態度である。このような傾向をもつ先覚者中の先駆者たる逍遙は明治三十四年に世に問うた「英詩文評釈」の緒言に英文学教授者、研究者のとるべき態度を次のように表明しているという。

* 矢野峰人：日本英文学の学統，研究社，序 p. iii

** 夏目漱石も上記の人々と同じ「学統」に属する巨匠であることは博士も勿論認めておられる。

げにや英語を教ふるをのみ主とせば必しも風趣を談ずるに及ばざるべし、しかれどもかりにも英文学を講ずとせば、作家の精神のこもれる所、其の文致の殊なる所、其の余韻の多少若しくは其の作家の特質なども併せて講ぜざれば不具足にあらずや。例へば、アヂソンの文の如き、若し之れを単に語義の解釈にとどめば大かたは平々坦々、その何の辺に詼諧の妙あるか、其の何が故にジョンソンの小品と異なるか、其の如何なる特質がゴールドスミスの散文に異なる。殆んど見分くるに由なからん。*

ここにみられるのは訓詁のほかに措辞、文体等を作品の理解、鑑賞批評等の手段として採用しようとする学風である。

矢野博士は上記の著書の中で学風の見地から明治四十年前後を以て日本英文学界を前後二期に分ち——逍遙等四人は第一期に属する人々である——その頃から訓詁註疏の学風が次第にわが英文学界の主流となったこと、また今次大戦以後のある時期は上記先達の踏んでいた本道に復帰せんとする過渡時代とも考えられるという所見を述べておられる。

勿論、訓詁学の盛であった「第二期」においても、上記四人の巨匠と傾向を等しくする人々がいたのは事実である。その一人に私は 塩谷 栄 の名をあげたい。** 「不如帰」等の英訳のほかに流麗な英文に託した少年時代の思い出をアメリカの書肆から刊行したこともあるこの学者は文体の研究を主にした「ソヴ

* 日本英文学の学統、坪内逍遙、p. 5.

** この派に属する人々は私学系に多かったようである。日夏耿之助の名も逸することはない。正確な題名は忘れたが、ある雑文中にこの詩人教授は訓詁一点ばりの英語教育を非難し、英語を芸術大学において音楽、美術が教授されているようにその美に開眼させるべき必要を説いていた。次の言葉にも訓詁学への皮肉をこめた批判が聞かれる。「かつて、うしごめ研究社といえるふみ屋の爺々、大森の僑居を杳々訪い来りてその詩（ポオの詩）の訳註を乞ひしことあり、かうやうのわざこそ、語の物学びに迂きわが最も齷齪しとなす所、さて又今当代の英学家といはるる士流の唯一の自得とはなし給ふところなる。いで事にふさへる器者こそ他に多かんめれと、すげなく聞え否みて帰しつ。」（ポオ秀詞、洗心書林、しりへかき p. 163）

ろあるき」という名著を大正の初年世に送っている。^{*} その序文中に次の一節が見られる。

現今英語の研究には進歩の著しきものがあるて、意義の窮探に精緻を極めて来てゐる。甚だ喜ばしいことではあるが、單に意義そのもの丈けでは内容の凡ではない。文学的に考ふれば、意義のある言ひ顯し方によりて、内容の豊富なるか、貧弱なるかゝ極るのである。されば一の作品を捉へて、その語句の意義を解しても、それ以上の事に考を及さなかったなら、内容を委く解し得たとは云へない。^{**}

上記の見地から、著者は内容を十分に解し得べき方法として文体の研究を重視し、「シェレエが西風の歌」、「キップリングと彼が散文」等々のすぐれた文体研究を実地にみせている。「そゞろあるき」の序と「英詩文評釈」の緒言とを読み合せるとき、われわれは逍遙の先覚者ぶりに驚嘆するとともに、二十年后にその学風が、文体研究——著者は文体即内容という見解にたっている——という立場に継承されていることを知る。著者が序文の末尾に書きしるしている「大正における英語研究もやがてここまで（文体研究のこと）進むであろう」という希望の一端が遂げられたのは、大正も終り昭和も可成り年月を経てからであった事を想起すると、訓詁の学風がいかに根づよいものであったかを今更らのように痛感せざるを得ない。^{***}

「そゞろあるき」がでてから二十余年を経た昭和の初め、慶応大学に英文学を講じていた戸川秋骨が当時の英文学研究の傾向について次のような感想を述

^{*} 塩谷榮：そぞろあるき，至文堂，大正五年。

^{**} 同上，序 pp. 1, 2.

^{***} 英語学者の手になる学問的な文体論研究は山本忠雄博士の「文体論研究」（三省堂昭和十三年発行）がその草分けであろう。この著書は文体論の根底になった言語観や方法を紹介した「文体論への方向」と、生物学的、美学的、心理学的方法を解説しその方法に基いた実践「文体と人格」，「西田幾太郎博士の文体」を含む「文体論の問題と方法」の二部から成っている。ただしイギリス文学からの実例は「文体と人格」のみである。

べている。

今年はシェレエ没後百年といふので、いろいろその伝記や讃辞などが定期刊行物に散見したやうである。併し私の見聞の狭いためかも知れないが、まだシェレエの詩そのものに就いての文字をあまり見なかったやふである。シェレエの宗教観とか思想とか恋愛観とかいふやうな事は随分聞かされたやうだが、大事なその恋愛詩はどういふ処が良いのだから、どういふわけで良いのだからと云った事を教へてくれた文字は、あまり見受けなかったやうに思ふ。只私の見た内では「英文学研究」に掲げられた土居光知氏の「Prometheus 劇の研究」といふ一文が詩そのものを取り扱ったもので、私には尤も有益なものであったことをここに一言する。私共は修業の期にあるのだから、宗教観とか世界観とか云ったやうなあまり高遠な議論や教へよりも、先づ土居氏のやうな詩そのものの解剖用字節奏等の良否を具体的に教へて貰ひたいのである。*

この秋骨の発言は二つの点で注目すべきものであると思う。第一の点は大事な恋愛詩はどういう所が何故良いかというような事を詩そのものの解剖用字節奏等の良否に照らして具体的な説明を聞きたいという要望である。これは作品を理解する上に単なる訓詁註釈を越えて措辞文体の美的判断が重要であることを強調したものであると思う。その意味においてこの態度は逍遙、塩谷榮等に相通するものがある。第二は詩そのものについて教えられるものが少く、「高遠」な論文が多すぎるという批判である。綿密な「言語分析」を含む作業による内容の理解、鑑賞が詩文の批評の先決要件であるにかかわらず、これを忘れた、あるいは顧りみない「論文」が横行している不自然な状態に対する不満の表明ではないか。このような手つづきを欠く「批評」はひっきり根無し草であるという正当な警告ではなかったであろうか。

秋骨のこの論文がでたのは我国の英文学研究が「紹介的解説的な傾向」の顕

* 戸川秋骨：英文学覚帳，第一書房，昭和六年，シェレエ雑談 pp. 85, 86.

著な大正期から「研究法がその鑑賞とともに英本国のそれに近似して来た。」*
といわれる昭和の初めである。さてその英本国の研究や研究法で我国の学徒に
影響を与えたというものは如何なる特色をもつものであろうか。ある権威者の
説によれば、「史伝的研究を主として、人と作との関係や、個々の人や作を通
して時代を見たり原則を考えたりする。」** ことであるという。文学研究法と
して見た場合の論議は別問題として、この方法は単に資料の蒐集という点から
も、特に恵まれた環境にある少数の人々を除き、外国の研究者に重大なハンデ
ィキャップをおわせ、ひいては独創的な研究の障碍となる因子を含んでいるの
ではあるまいか。また組織的研究法に関しては同じ学者が「ドイツの学者は文
芸学とか文芸科学とかいうことを唱えるけれども、イギリスの学者はそういう
学問にはあまり関心をもたないらしい」*** といっておられる。この点に関する
さらに手厳しい批判によれば、イギリス文学研究において枢要な地位を占めて
いる大家は、「あらゆる理論と体系を軽蔑」し、その論文たるや「無責任で、
気まぐれで、印象風」な伝統を特徴とするという。**** この説は多少割引きし
て受取るべきものとしても、英本国の研究法に近似するという学風は資料蒐集、
利用上の困難、さらに確固たる体系をもつ研究法の欠除等を含むことを考慮す
るとき、外国文学の研究法としては反省すべき余地はなかったであろうか。ま
た「標準的作品に親しんで、それを正確に理解し、十分に鑑賞し、公平に批判
する習性を身につけようとする」***** 手続き、態度の重要性はいうまでもな
いが、理解、鑑賞の面においても「四大先覚」並びにその学統に属する人々の
主張に基づく学風が強化され、体系化されて普及していたならば、日本の英文
学研究は今日よりもさらに美事な成果をみせたのではなかったか。後者の場合

* 福原麟太郎：日本の英語，研究社，昭和の日本英文学，pp. 63, 64.

** 斎藤勇：イギリス文学史，研究社，第二十世紀学界及び詩壇，p. 576.

*** 斎藤勇：英文学五十五年(3)，夏目漱石，英語青年，1963年6月号，p. 328.

**** R. Wellek and A. Warren：Theory of Literature, Chap. XX, The Study of
Literature in the Graduate School, pp. 285, 286.

***** 斎藤勇：英文学五十五年(9)，英国留学から定年退職まで，英語青年，p. 519.

肝要なのは実践であることは云うまでもないが、方法論の確立が基礎工作としてもつ重要性も実践そのものに匹敵するものであることもまた論をまたない。

さて、我国の先覚者達の考えていたような線にそった研究方法として最も注目すべきものは十九世紀末フランスにおこり、今日に及んでいる“*explication de textes*”という方法である。これは印象批評を廃し、あくまで作品の本文に即して「本文を理解すること、即ち本文の各部分と細部とをその精神とその字義において、その全体を統括的に理解し、判断する」* ことを目標とし、その手段としては通常の訓詁註釈を含む文献的作業の外に措辞、文体などの考察をもとり入れ、言語的表現の面に即して作品の全体的把握を目指す組織的研究法である。この方法による作品の正確な理解、十分な鑑賞という基盤にたつ批評こそ本来の批評ではなかるうか。

この *explication* は我国においては矢野峰人博士や島田謹二教授によってその文学研究法としての重要性が指摘され、両氏の著作や、吉田精一教授を中心とするグループの著述には日本文学の作品を材料とする実践が掲げられているが、この方法の原則的な解説はまだなされていないようである。筆者はその原理と実践を英文学の作品によって示した殆んど唯一の参考書たる F. Boillot の *The Methodical Study of Literature*** の方法論の紹介を企画しているが、今回は紙幅の関係上、Boillot の論評の見本として Lamb の “*Dream Children*” を選んでみた。序論、方法論、Ruskin, Keats 等の詩文の *explication* を含むこの著述の全貌はいずれ近く機を見て紹介したいと思っている。

〔Ⅱ〕

DREAM CHILDREN ; A REVERIE

CHARLES LAMB

Children love to listen to stories about their elders, when *they* were

* G. Rudler : *L' EXPLICATION FRANÇAISE*, 1952, p. 4.

** F. Boillot : *THE METHODICAL STUDY OF LITERATURE*, Paris, 1924.

children ; to stretch their imagination to the conception of a traditionary great-uncle, or grandame, whom they never saw. It was in this spirit that my little ones crept about me the other evening to hear about their great-grandmother Field, who lived in a great house in Norfolk

(a hundred times bigger than that in which they and papa lived) which had been the scene — so at least it was generally believed in that part of the country—of the tragic incidents which they had lately become familiar with from the ballad of the Children in the Wood. Certain it is that the whole story of the children and their cruel uncle was to be seen fairly carved out in wood upon the chimney-piece of the great hall, the whole story down to the Robin Redbreasts ; till a foolish rich person pulled it down to set up a marble one of modern invention in its stead, with no story upon it. Here Alice put out one of her dear mother's looks, too tender to be called upbraiding. Then I went on to say, how religious and how good their great-grandmother Field was, how beloved and respected by everybody, though she was not indeed the mistress of his great house, but had only the charge of it (and yet in some respects she might be said to be the mistress of it too) committed to her by the owner, who preferred living in a newer and more fashionable mansion which he had purchased somewhere in the adjoining county ; but still she lived in it in a manner as if it had been her own, and kept up the dignity of the great house in a sort while she lived, which afterwards came to decay, and was nearly pulled down, and all its old ornaments stripped and carried away to the owner's other house, where they were set up, and looked as awkward as if some one were to carry away the old tombs they had seen lately at the Abbey, and stick them up in Lady C's tawdry gilt drawing-room. Here John smiled, as much as to say, "that would be foolish indeed." And then I told how, when she came to die, her funeral was attended by a concourse of all the poor, and some of the gentry too, of the neighbourhood for many miles round, to show their respect for her memory, because she had been such a good and religious woman ;

so good indeed that she knew all the Psalter by heart, ay, and a good part of the Testament besides. Here little Alice spread her hands. Then I told what a tall, upright graceful person their great-grandmother Field once was ; and how in her youth she was esteemed the best dancer — here Alice's little right foot played an involuntary movement, till, upon my looking grave, it desisted — the best dancer, I was saying, in the county, till a cruel disease, called a cancer, came, and bowed her down with pain ; but it could never bend her good spirits, or make them stoop, but they were still upright, because she was so good and religious. Then I told how she was used to sleep by herself in a lone chamber of the great lone house ; and how she believed that an apparition of two infants was to be seen at midnight gliding up and down the great staircase near where she slept, but she said “those innocents would do her no harm ;” and how frightened I used to be, though in those days I had my maid to sleep with me, because I was never half so good or religious as she—and yet I never saw the infants. Here John expanded all his eyebrows and tried to look courageous. Then I told how good she was to all her grandchildren, having us to the great house in the holidays, where I in particular used to spend many hours by myself, in gazing upon the old busts of the twelve Caesars, that had been Emperors of Rome, till the old marble heads would seem to live again, or I to be turned into marble with them ; how I never could be tired with roaming about that huge mansion, with its vast empty rooms, with their worn-out hangings, fluttering tapestry, and carved oaken panels, with the gilding almost rubbed out—sometimes in the spacious old-fashioned gardens, which I had almost to myself, unless when now and then a solitary gardening man would cross me — and how the nectarines and peaches hung upon the walls, without my ever offering to pluck them, because they were forbidden fruit, unless now and then, — and because I had more pleasure in strolling about among the old melancholy-looking yew-trees, or the firs, and picking up the red berries, and the fir-apples, which were good for

nothing but to look at — or in lying about upon the fresh grass, with all the fine garden smells around me — or basking in the orangery, till I could almost fancy myself ripening too along with the oranges and the limes in that grateful warmth — or in waching the dace that darted to and fro in the fish-pond, at the bottom of the garden, with here and there a great sulky pike hanging midway down the water in silent state, as if it mocked at their impertinent friskings, — I had more pleasure in these busy-idle diversions than in all the sweet flavours of peaches, nectarines, oranges, and such-like common baits of children. Here John slyly deposited back upon the plate a bunch of grapes, which unobserved by Alice, he had meditated dividing with her, and both seemed willing to relinquish them for the present as irrelevant. Then, in somewhat a more heightened tone, I told how, though their great-grandmother Field loved all her grand-chidren, yet in an especial manner she might be said to love their uncle, John L —, because he was so handsome and spirited a youth, and a king to the rest of us ; and, instead of moping about in solitary corners, like some of us, he would mount the most mettlesome horse he could get, when but an imp no bigger than themselves, and make it carry him half over the county in a morning, and join the hunters when there were any out — and yet he loved the old great house and gardens too, but had too much spirit to be always pent up within their boundaries — and how their uncle grew up to man's estate as brave as he was handsome, to the admiration of everybody, but of their great-grandmother Field most especially ; and how he used to carry me upon his back when I was a lame-footed boy — for he was a good bit older than me — many a mile when I could not walk for pain ; — and how in after life he became lame-footed too, and I did not always (I fear) make allowances enough for him when he was impatient and in pain, nor remember sufficiently how considerate he had been to me when I was lame-footed ; and how when he died, though he had not been dead an hour, it semed as if he had died a great while ago, such a distance

there is betwixt life and death ; and how I bore his death as I thought pretty well at first, but afterwards it haunted and haunted me ; and though I did not cry or take it to heart as some do, and as I think he would have done if I had died, yet I missed him all day long, and knew not till then how much I had loved him. I missed his kindness, and I missed his crossness, and wished him to be alive again, to be quarelling with him (for we quarrelled sometimes), rather than not have him again, and was as uneasy without him, as he, their poor uncle, must have been when the doctor took off his limb. — Here the children fell a-crying, and asked if their little mourning which they had on was not for uncle John, and they looked up, and prayed me not to go on about their uncle, but to tell them some stories about their pretty dead mother. Then I told how for seven long years, in hope sometimes, sometimes in despair, yet persisting ever, I courted the fair Alice W — n ; and, as much as children could understand, I explained to them what coyness, and difficulty, and denial, meant in maidens — when suddenly turning to Alice, the soul of the first Alice looked out at her eyes with such a reality of representment, that I became in doubt which of them stood there before me, or whose that bright hair was ; and while I stood gazing, both the children gradually grew fainter to my view receding, and still receding till nothing at last but two mournful features were seen in the utmost distance, which, without speech, strangely impressed upon me the effects of speech : “We are not of Alice, nor of thee, nor are we children at all. The children of Alice call Bartrum father. We are nothing ; less than nothing, and dreams. We are only what might have been, and must wait upon the tedious shores of Lethe millions of ages before we have existence, and a name” — and immediately awaking, I found myself quietly seated in my bachelor arm-chair, where I had fallen asleep, with the faithful Bridget unchanged by my side — but John L. (or James Elid) was gone for ever.

状況証拠の研究は一般的な理由にもとづいて推奨したのであるが、明らかに

筆者とその生涯に深い影を及ぼした事実にもとづいているこの随筆におけるほどこれがその完全な理解に必要な場合はあり得ないと思われる。

それ等の事実を知らない読者にとっても、この話しは勿論その興味の多くを失なわないであろう。しかし、そのような読者にとっては、本篇は一傑作たるにとどまり、作者の芸術的な頭の動きを明らかにするに過ぎないと考えられる。ところが、材源の研究は文学的享受に関して美感の域外にこの話しの魅力を拡張する。それは人生の悲哀に対して惻隱の情を促がす。要するに、この話しが深く人間的であることを明示するのである。

ラムが1812年に「夢の子供」を書いたとき、同年十月二十六日におこった兄の死は未だ記憶も生々しく、ラムの胸に重くるしくのしかかっていた。孤独感が——ラムは当時五十歳に近かった——自ら娶らんとして果さず、現にバートラムという名の男の妻となってしまうていたアン・シモンズ（ここでは Alice Wren なる見破り易い仮名になっている）の求婚に成功していたならば、自分の一生はどうなっていたであろうという悔恨の気持ちに追いやったのも無理からぬことであった。この話しが書かれた頃はアン・バートラムはまだ生きていた。しかしラムにとって彼の青春の乙女アン・シモンズは死んでしまっていたのである。

こうした伝記上の事実を知することは、純粹に人間的な見地からも必要不可欠な事であるが、この短篇においては記憶と想像の演じる役割を比較評価し得るが故に価値ある些事が他にある。ラムの祖母のフィールド夫人はヘレフォード州のブレイクストーン邸の女中頭で、ラムは時々そこで休暇をすごしたことがあった。彼女は實際世人の敬愛を受けていた婦人で、少年ラムに永続的な影響を与えたのであった。彼と兄が足を悪くした事件も同様に事実である。

「夢の子供——白昼夢^{ダイドリーム}」という表題それ自体意味深長である。レヴエリーというのは白昼夢にあたるフランス語である。

白昼夢とはわれわれの物思いを自然に、そこはかとなく、われわれの情緒や、精神の意識的活動や、興味やいとなみ等が下地を作った徑路に流すことで

ある。筆者がわれわれに信じさせようとしているのは、ここに画かれたことは彼の想像に強く動きかけたもので、その精神生活の一齣を客体化して見せているということであるが、これは信じてよいであろう。

それ故、これは人工的に作られたものではない。話しのほうで筆者に話しかけ、筆者はわれわれと全く同様に聞き手であったように思われる。差異といえどその話しが筆者に関するものであったということである。

実際には事情はそれ程簡単でなく、ラムのように文学に精魂を傾けていた人の場合には、これでは自発性と芸術的本能と意図がそれぞれ構成にあづかっている役割りを正確に判定していない憾みがあるかもしれないが、受ける印象はたしかに今述べたようなものと考えられる。さて全篇に充満している感情はいかなるものであろうか。それは簡単に要約できる。つまり深い悲哀の表現である。

しかし、情緒というものは曖昧模糊たる間は、共感を生み得ない。それはある特定の要因にもとづく一身上の、独自のものであることが必要であるが、この場合にはわれわれは勿論それに相違ないという感じをもつのである*。彼の悲哀はよる年波とそれがもたらす体験が子供の無い人々に与える抜き難い気持ち、即ち愛児こそ人間を破壊的な孤独から守ってくれる唯一つのものであるという気持ちから生れた深刻、痛切な悲哀である。自分の子供に自分を残したいというこの願望、自分の肉親の共感を得たいという切望は人間誰れしもの心の中に燃えている。

幸運にも少数の豊かな才能に恵まれた人々にとっては、その遂げ得なかった願望の必然的な結果を回避する方法がある。自らの精神を持続せんとする切なる願いを書物の中にわが思いを書き表わすことにより、即ち人々の記憶の中にわが地上の生命をひきのばすことにより満し得るのである**。この人々はまた

* ラムは独身であり、その孤独感は姉のメアリ（ここではブリジェットという名ででている）が殺人狂であるという事実によって一入深まったのである。

** これが文学発生の一原因である。

心のおくがに潜む感情を外に表わすことにより——これは誠実ならば常に人間同士から必ずや反響を受けずにおかない訴えであるが*——心の苦悶をやわらげ、共感を得んとする切望を満し得るのである。

そこでこの随筆が単なる文芸作品ではなくて、誠実な人間記録たる理由が分ってくる。

ラムの真実に対する深い配慮については、その事実や人物が実人生の体験から借用されたものであることを明示して、その一証拠としておいた。

この事実と同様に明らかなのはラムの感情の誠実さである。彼は兄のことにしろ、二人の関係にしろ虚偽の理想化をおこなっていない。感傷家のごとく「一片の雲も二人の關係に暗影を投じなかった」なことにもふれず、また孤独を誇張することもしていない。**ラムは自己の欠点、「兄に対する私しの斟酌がいつも十分だったとはいえないようだ」というような忘恩行為や、「時たまは別として、もいでやろうと言いださずに」などというような誠実にもとる行為などを隠そうとはしていない。ラムの誠実は前の簡単な伝記から抑制が支配していることが十分認められる故、尚更効果があり感動も一入である。「ラムはブリジェットが殺人狂であるといってもよかったのであるが、實際述べていることは姉が誠実であるということである。」**「ラムは分別豊かな人間であつたので、不幸を全部一度に集めてしまうような非常識なまねはしなかったのである。」**

この一篇の根柢にある知的、情緒的な衝撃は十分に認知できたので、今度は更に進んでラムの文学的技術を鑑賞しうる段階にある。

まず第一に注目すべきは全篇に漲ぎっている微妙な、香気馥郁たるしかも明白な雰囲気といってもよし、またはすべて心象にすぎない故に、再三再四打ち鳴らされる回帰音、「そのかみ」という回帰音といってもよいものである。

昔しあって今はなきものすべてに特殊な魅力の存することは人皆の感じるところである。われわれの心の中では過去はいわば詩的に物質的性質を剝奪さ

* これから叙情詩風が発生した。

** はともにアーノルド・ベネット、文学趣味 p. 38, Hodder and Stoughton 社発行。

れ、記憶の魔法的魅力によって蘇生した現在のようなものであるが、チャールズ・ラムほどその美しさに敏感な人はなかった。エリア随筆集の最初の二編を一読しさえすればこれは痛切に感ぜられることである*。

この随筆には終始遠い昔しの詩情豊かな静穏を示唆するささやかな言及が巧妙にないまぜられている。これは恐らく余りに微妙で分析を許さないものであろう。絵画的な雰囲気は分析できないが、それでもその原因を指摘しようとすることは可能である。まず、われわれの心に浮ぶ人物は大伯父、曾祖母である。次に舞台装置がある。即ち陰気な水松の老樹、旧式な庭園、すり切れたカーテン、はたはたとゆれ動くつづれ織りの壁掛け、彫刻のある檜の木羽目板、それから歴史の初期に開いている小窓、即ちローマの皇帝であった十二人のシーザー達、古謡に関する言及、一、二の古風な単語や、云いまわしの使用、たとえば“fell a-crying”「泣きかけた」、grandame「祖母」等、後者は独特の古風な味わいをもっている。

過ぎ去った昔しが特に子供相手にする話しの中では如何に自然に手に入らぬものへの憧れを表わす不気味な感情を喚起することであろう。この随筆にもこの感じはたしかにみられる。

兄の死はいつまでもいつまでも忘れられなかった……

しまいには古い大理石の首が生き返ってくるように見えた……

ふとアリスのほうをふり向いて見ると……

「ラムが成功しているいま一つの理由は祖母と兄の主な特色や、ブレイクストーン邸やその庭園の詳細な描写に実証されている美しい事物や、立派な行為などに寄せている愛情である。」これはアーノルド・ベネット氏の適評であり,**その実例を示すことは極めて容易であろうが、われわれは庭園の描写を稍詳細に考察して満足することにしよう。

われわれは如何にすればその描写の美を説明できるのであろう。その描写の

* 休暇中のオックスフォード，南海商会。

** 文学趣味，p. 38.

燃ゆるが如き生氣によって説明できるのである。如何に多種多様な感覚——形状、色彩、香氣、味感、新鮮、溫暖、運動、静寂等の感覚があつた短かい描写中に喚起されているかに注目すれば、この隨筆の真ん真中に置かれているあの小「活人画」の色鮮やかな強烈さは、夢のような背景の比較的しおひ色調と対照して引立ってくる。

その他の背景は事実不明瞭で、夢の実体のなさと芸術的に調和した写生になっている。古い大広間は「二人とパパが住んでいるよりも百倍も大きい」という想像に多くをゆだねる適切に子供っぽい言葉で示唆されているに過ぎない。

その朦朧たるバックを背景にして子供達は鮮やかな浮彫りとなつてくっきりと浮出している。これは大事なことである。子供達になるほど実在のものだとわれわれに思われれば思われる程、子供達はラムにとっていかなる意味をもつかを、われわれは益々深く感じ、従つて二人は夢と同じ品柄にすぎないことが分つたときのアンティクライマックスも益々大きくなるのである。

それではラムは如何ようにして自分の創り出したものをあのように真に迫り、生き生きしたものにしているのであろう。いくつかの方法によっているが、それがすべて傑出したものなのである。第一、子供達の存在を現在の瞬間に限定していない。「二人が森の子供という民謡で最近馴染みになった出来事」によって巧みに二人の過去に言及している。

それから、ラムは二人を別々に紹介することによって、われわれの興味をつないでいる。ジョンはアリスより後で紹介されている。全篇を通じて、一定の間隔をおいて二人の子供は話を聞きながら、その主要な節々をいわば行動で表わしている様子が画かれている。

「ここでジョンはまるで“そんな事をしたら本当に馬鹿げたことだろう”と云わんばかりに口もとをほころばせた。——ここで可愛いアリスは両手をひろげた——ここでアリスの小さな右足は思わずステップを踏んでいたが、しみに私しがむつかしい顔をしているのを見て、止めてしまった。——ここでジョンは眉をすっきり捻上げて勇気があるぞという顔付きをしてみせた——。ここ

でジョンはそっと皿の上に一房のぶどうを返した。——ここで子供達は泣きかけた……そして美しい亡くなった母親の話しを少ししてほしいと頼んだ。」

それから絶妙な「ここでアリスは彼女のなつかしい母の顔付、やさしさが勝っていて叱責しているとは見えない顔付をみせた。」がある。

話し手に対する子供達の反応もまた明らかにされている。

この話し手と若い聞き手との間のユーモラスな相互作用は、子供達を一段と本物そっくりの實在の人物さながらにみせるのに役立っている。そのほか多くの言及もその實在を信じさせるのに貢献している。現実的な口調や言葉づかいによって、われわれはラムが実際子供達に話しかけていることを感じる。ラムは思想や表現を聞き手の年齢に合わせている。ラムの人物描写は子供に当然魅力のありそうな曖昧な一般的言葉に託したいとも簡単なものである。

「祖母さんのフィールドはとっても善良な信仰の深い人だった。」「自分はその半分も善良でなく信仰も深くなかった。」「ジェイムズ・エリアは美男子だったが、勇気もあった。」「兄はほかの者には王様だった。」

「百倍も大きい」という面白い誇張、「小さな赤腹の駒鳥」という適切な細目の選択等はみな劇的真実をもつ筆致である。

「序でながら、最後の厳粛な効果を準備しつつラムは二人の子供の物思わしげな美しさに関する新らしい、強烈な写生——二人の模倣性、二人の従順さ、寛大な気持ち、二人の間違いをすまいとする切望、悲嘆から歓喜へ不器用に忙しく逃れようとする態度等で読者を感動させる。その後幾日も子供を見れば必ずやラムの画いた子供の気品を想起するであろう。』*

この随筆の構成を簡単に検討してみよう。

それは次のように表わすことができよう。

1. 序 言
 - a) 一般的； b) 特殊的
2. 人 物

* アーノルド・ベネット：文学趣味，p. 39.

- a) 祖母フィールド； a1) 亡霊； b) 大広間のチャールズ・ラム；
b1) 庭園の描写； c) ジョン・ラムの生活； c1) その死のもたらした印象； d) アリス W—n

3. 結 語

目 覚 め

この構造上の骨組みは勿論存在しているが、肉の下に隠れている骨格と同じく外部からは認知できない。それに段落全部が水も洩らさぬ完璧をもっているというでもない。之等の段落は文体と調子の統一のみならず、意図の統一によっても結合されている。

次の諸点が窓図の統一を明らかにしており、それ等はすべて話しの論理的、芸術的必要によって決定されている。

まず第一の点は全篇を通じて子供の存在と話しに対する二人の個人的な「反応」に気づかせるもの、次は、いま一人の目に見えない Alice W—n の霊の存在であるが、これも全篇を通じてみられる。彼女自身の名が少女に与えられており、はじめの所で彼女の存在は巧みに又美しく暗示されている。

「ここでアリスは叱責していると云うにしては優しすぎるあのなつかしい母の顔付をしてみせた。」

名前の選択と眼の表情による母と娘の神秘的な融合は、最後の一体化への下地になっている。

思考の統一感も一篇の中程でアリスとジョンが最後に亡霊に変形するという先触れである二人の幼児の亡霊と、アリス自身の死の知らせと、この夢は最後には次第に醒めてゆくのだという心構えをさせるジョンの死を述べたくだりによって創られている。ジョンの死は作者の孤独の第一原因になっている。

一つの考えから別の考えに移ってゆく過程が本篇では興味が深い。この随筆の中では話しの中に話しが入れ子になっている。即ち読者相手の話し（それが全篇である）と、その中にある子供相手の話しである。

さて読者相手の話しの中では、推移は殆んど気がつかない程度で、芸術的に

隠蔽されている。たとえば、いつその話しが子供相手の話しの中に融けこんでいるのか分らない。

われわれはアリスが顔をあげる時、子供相手の話しを聞いていたことに気付くだけである。同様にこの随筆の終り際にラムがどこで子供達に話しを止めているかは全然不明である。

終末のあの次第に薄れてゆく光と、当初の次第に現れてくる光との芸術的対応関係は芸術的均衡のすばらしい効果を生んでいる。また他方において、推移の一つはわざと強調されている。

「それから少し調子を高めて、私はこういった。」

これは適当な場所でこの随筆の前半、後半の関係を旨く表現している。われわれは、ラムがこれから自分の一身上により深い影響を与えた人物について語るのだということを感じる。

子供相手の話しの途中では、推移は会話体にふさわしいようにもっと唐突で、時には単に言葉の上だけにみられる。

構成の検討を終るにあたって、ここの結語はすぐれた随筆の場合の例に洩れず、それまでのことを要約し、新しい考えを導入していることに注目したい。

これは前に述べられてあることからの当然の帰結で、いまではそれが新しい考えの基になったことが明瞭に看取されるのである。

この随筆の語彙については云うべきことは殆んど無い。効果は簡単な単語、簡素な話しに適合した単語によって生じている。語彙が主題に適合し、劇的眞実に忠実であるという証拠として、二、三の単語を例示しよう。

「おゝば—grandame」という古語は既に特に言及しておいた。“room”の代りに少し耳慣れぬ“chamber”という語を使用しているのはその語が何ともなしにその出現を心待ちさせる不思議な亡霊と旨く調和している。

話し手——フランス語では contour というもの——の調子は少数のくだけたあるいは口語体の表現によって示され、それが保持されている。

「赤腹の駒鳥のことまでの一部始終——さよう、しかも大部分——一番のおどり上手と私がいていた——それをおったてる。」

写実的な表現の例としては、

「すいすいと泳ぐうぐい」——「中程にじいとかまえこんでいる不気嫌そうな川かます」等がある。

しかし、くだけた調子がでているのは特に構文である。文体はぞんざいになっている個所がいくつかある。

「私よりか年上」—「見た目に綺麗なだけでほかに取り柄がない」—「大家にわれわれを呼んで」「生きている間はまあまあだったが、それも後ではあばらやになって……」

語法ですら不正確であると思われる場合もある。

「それは殆んど取り壊され、古い飾り物もすっかりはぎ取られてしまった。」

勿論括弧に入っていたり、いなかったりする附帯節が非常に多い。これはラムの作品に常に見られるものであるが、ここではくだけた話しと特に調和している。会話調はまた反復による強調の数多くの実例や、無暗に長たらしい文章によって認知できる。

「いつまでも、いつまでも忘れられなかった。」「兄の親切が受けられぬと思うと寂しかったし、不気嫌がもう見られぬかと思うと寂しかった。」「次第次第に後しざりして……」

比喻は極めて少数である。詩情は端的に訴えてくる感情自体に含まれており、われわれの想像を芸術的な比喻の導入によっておびき出す必要はない。

しかし、一つだけ注意に値する比喻があり、それは文体の突然の高揚を表示している。

「ひどい病気になって痛みで身体はかがんでしまった、しかし病氣も祖母の意気を曲げることも屈めることも出来ず、祖母の意気は相変らず軒昂たるものがあつた。」

この比喻は上記の通り美事に保持され、最後の「相変らず軒昂たるものがあつた」という気高いクライマックスに極っている。

「すいすい泳ぐうぐい」* とか、「中程にじつとかまえこんでいる川かます」などのような他の比喻は実は上と同じ意味の創造ではない。ラムは単に絵画的なしかし一般に流布している比喻を利用しているにすぎない。

この随筆の効果はその誠実にもとづくことは既に指摘しておいた。その結果大体において、文学技術の少くとも無意識的利用によって生じる声音を意味の為に充当する方法は用いられていない。

実例が事実見られるとすれば、全く偶然によるもので、即ち靈感か無意識的表現であるが、純粹に記述的な節に見られる場合がおそらく寧ろ多いと思われる。

最初の場合の実例として二、三あげてみよう。

「がんというむごい病気がでた」—“cruel disease called a cancer came”

その反復によって、ここではCの音がいわば爪でひっかくような効果**をあげ、それが意味を強めている。

「次第にばやけていった」—gradually grew fainter では頭韻は次第に消えてゆく段階を示唆しているように思われる。次の実例では多くのS音の反復は二重の効果——一つは不気味さを示唆する暗示性と一つは陳述を強調して注意を強要する印象性——をもっている。

“Features were seen in the uttermost distance, which without speech, strangely impressed upon me the effects of speech”

「顔かたちがいやはての所に見え、だまっていながら、不思議に声を出して

* ラムがこの魚の運動を興味を以て眺めていたことは明らかである。“Wanton like young dace in the streams”「流れの若いうぐいのように奔放に」と比較せよ。

** Mais la légère meurtrissure, されど軽き傷は
Mordant le cristal chaque jour. 日々水晶をかみつづ

Sully Prudhomme. La Vie intérieure, Le vase brisé.

いるように私には思えた。」

しかし、声音が独自の生氣をおび、芸術的に活気を帯び全般の効果に寄与しているのは庭園*の鮮明かつ変化に富む描写の場合である。

“Basking in the orangery, till I could almost fancy myself ripening too along with the oranges and the limes in that grateful warmth.”

「オレンジ温室で日向ぼっこをしているうちに、自分もその有難い暖かさの中でオレンジやライムの実と一緒に熟れてゆくのではないかと思った。」

ここには母音の色暖かな燃えたつような色どり、もし比喩的な表現をさければ、澄んだ、朗らかな声音の豊かなメロディがある。透明な池の魚の小さな写生は声音の見地からは特に適切である。

“the dace that darted to and fro”

“すいすいと泳ぐうぐい”

頭韻と短い一音節の単語はうぐいの動きと完全に調和している。この動きの暗示を一段と強調しているきびきびした弱強格のリズムは、次文の、のろのろした多音節語と対照的になっている。

“great sulky pike hanging midway down the water in silent state”

「水の中程にじいっとかまえてこんでいる不気嫌そうな大きな川かます」

この文では、川かますの姿勢を述べている単語はすべて同じ文字 S ではじまっている。

文体がいかに旨く内容に支配されているかは、ベネット氏が前に引用した書物の中で明らかにしている**。「書き出しはおだやかな叙述様式を用いた実に地味なもので、子供に関する多少の軽口でにぎやかになっている。曾祖母のフィールドが話題になっているときは、文体は荘重で、作者が画趣に富む古い大邸宅の稍念入りの感想に移ると、文体はいわば意識的な美しさを帯びてくる。

* ラムは庭作りが大好きであった。

** 文学趣味, p. 51.

この美しさはなお一層美しい庭園の描写になると一段と強烈の度を加えてくる。しかし、この随筆の真の分岐点はラムの筆が兄のことに近づくところにある。「それから多少調子を高めて私は話した」云々という字句がまぎれもなく分岐点を示している。その後文体は次第に熱をおび、莊重の度を増し、遂に全篇の最高潮に達する。「そして、私がじっと見つめながら立っていると、二人の子供は段々遠のいていって次第にぼやけ、しまいにはいやはての所に二人の悲しそうな顔しか見えなくなってしまった。この顔はだまっていながら声をだしているように私には思えたのは不思議だった。」

所々に見られる奇妙なユーモラスな筆致が叙述に生気を与え、われわれの微笑をさそう。

「ジョンは眉をすっかりひろげた」,「実に善良だったので詩篇全部を暗んじていた」(善良さの証拠としてはおかしなもの),「オレンジと一緒にうれる」,「時たまは別として、もいでやろうといわずに」

この小篇がいかなる影響を及ぼしたかについては、われわれは発見しようとはしなかった。ここには E. V. Lucas のあげた実例二つをあげるに止めておこう。

London Magazine の1822年8月号には「夢の子供」に感興を受けた十四行詩がのっており、又この随筆はエドワード・エルガー博士の実に優雅な魅惑的な組曲のテーマになっている。

この研究は魅惑的な心の秘密の描写に向けられたラムの精神の動き方を多少明らかにした。ラムの誠実が芸術によって現実を劇的に変化し、しかも現実を尊重していることから諒解できる。

「この随筆を読み終ってから、よく考えてみるとその感動をもたらす力は常に美に対して眼をひらいていた人、いやそれどころか美につかれていた人が正確に記憶していた現実の感情を誠実にありのままに表現したことに起因することが判明するであろう。古い家々、庭園、高潔な老人の美しさ、子供達の美しさ、交友関係の美しさ、ひじかけ椅子でみる夢のふんわりとした美しさ——こ

れ等を全部集めて、この情調の源泉であった悲哀と悔恨と混和してあるのだ。』*
その悲哀は悲痛がゆるされたかもしれない時にも少しも悲痛の要素を含んでいない。そしてラムの悲哀に美を付与しているのはその品位ある（ふさわしいという言葉がより適当かもしれないが）無意識の自制である。

この誠実と自制とがラムの作品を純粋に知的な作品以上のものに行っていることは、われわれの既に見てきたことである。深い悲哀から生れたラムのあきらめと平静には偉大な気高さがある。これこそまさに悲哀が人間の精神をねる実例である。

この道徳的教訓は求められてもいず、表現されてもいず、単に暗黙のうちに示されているが故に一層雄弁であり一層有効でもある。それは教戒によらず範例による教訓である。

ラムの悲哀への諦観は高貴な人生観に由来する。それは人の一生で目だたず、われわれの深い惜しめない嘆賞が一番ふさわしい報奨である、日常普通の英雄的行為のすぐれた実例である**。

* アーノルド・ベネット。文学趣味、p. 40.

** アーノルド・ベネット氏があげている別の理由を下に引用しておく。

「何故夢の子供は古典であるか。それが古典である理由は諸君の前の世代と同じように諸君に対して気品の高い感情を伝え、より強烈に、より正当に、又より高貴に生命の鼓動に応じさせるが故である。またこれが可能になっているのはチャールズ・ラムが極めて気品高い、極めて敏感な、また極めて正直な精神の持主であったからである。ラムの感情は高貴であった。その感じ方は、実に鋭敏であったため己の感情を伝えて心やりするほかに道はなかったのである。そしてラムの精神作用は誠実であったが故に真実を誇張することも、縮小することもできなかったのである。もしラムがこれ等三つの特性のうち一つでも欠いていたならば、その迫力は狭まり、弱まり、その作品は古典とはならなかったであろう。彼の感情は至高美を欠け、従って伝達する価値が減じていたか、それともその感情を伝達するに十分な力を持たなかったか、それとも彼の正直がその感情を正確に伝達する緊張に堪えられなくなったであろう。とにかくラムは諸君の心にわれわれが歓喜と名づけるもので、高貴な感情に活潑に参与することによって特に生じるあの感動をおこせなかったであろう。兄を墓場におくり、忠実な殺人狂を傍らにおいて、独身者のひじかけ椅子

に座っていたとき、ラムは本当にこう思ったのである。「これは美しいことだ、悲哀は美しい。失望は美しい、人生は美しい、是非ともそれをいわねばならぬ。どうしても世の人に理解してもらわなければならない。」今日でもそれを諸君に理解させるが故にこの作品は古典なのである。」